

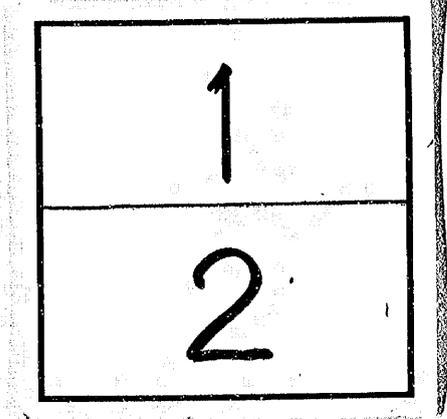


支那兵器製造所一覽表 (其二)

昭和七年三月四日  
技本調査班

名稱	位置	經營	主要設備	製造能力
南京兵工廠	南京城外 東側	本廠ハ前清時代ノ建築ニシテ最近軍用兵器修理工場ニ過シカリシカ民國十六年之ヲ擴張シ兵工廠トシ兵工廠直轄セルニ至リ 本廠及火藥製造廠ハ合併シ火藥製造廠ハ最近漢陽ニ合併シ目下作業アラサルカ知シ 職員ハ廠長以下日本留學生者多ク職員平時約千人ニシテ突勤ハ時間作業ヲナシ時局多端時ハ千三百人ニ増加シ作業時間ヲ延長セリト謂フ 工會アルモ職工ノ風潮良好ナル如ク徒勞者少ク設ケアリ	本廠内ニ機器工場、鑄造工場、鍛冶工場、木工工場、鋳造工場、火藥製造所、本廠、東方、合離、火藥工場、旋盤等工場、機軸工場、彈丸工場、同機軸工場、有シ水冷式機軸、銃等ヲ製造ス 実包工場モ通リ、機軸アリ 一般ニ機軸、配置密接ニ過キ手作業多キカ知シ 効力ハ馬力、蒸気機関ヲ用ヒ別石油發動機ヲ使用セルモノアリ 火藥製造所ハ從來無煙火藥ヲ製造セリ材料中石炭、開平炭ヲ使用シ鉄材ハ上海ヨリ購入ス由リモ系統明カナラス 実包及爆彈用火藥ハ大部水國品ヲ使用セリト 毒瓦斯ノ製造ニ就テハ日本工業大學出身技師一名研究ニ専任セリト謂フ	重機関銃(水冷式) 月製 三〇 七九小銃実包 毎日三五〇〇 戰時九〇〇〇 投下爆彈 月製二〇磅モノ 一二個 手投彈 三五磅モノ 四〇個 ト称スルモ實際ハ重機関銃月製四乃至五 小銃実包月製三四万程度ナラン 投下爆彈ニ茶褐藥及黄色藥ヲ溶融填実セリ 毒瓦斯ニ関シテハ、ロビンソン、ゴッパセトフエン等ニキチ場術的研究シアルカ知シ 輕機関銃(五年七月)現在ニ於テハ何レノ工廠ニテモ製造シアラス 皆外國品ヲ用ヒアリト謂ヘリ
上海兵工廠	本廠上海 高昌廟 黃浦江 岸	元江南機器局ト稱シ五十數年前清時代ノ建設ニ係リ其後補修ヲ加フルコト少ナカリシモ南京政府ニ移リテヨリ逐次改善セラレ旧式ナカラ相宜ノ設備ヲ有シ規模宏大ナリ 水陸ノ交通運輸便ニシテ元煉鋼廠(製鋼所)ヲ併置セシモ目下ハ分離シ獨立シアリ 廠員ハ日本留學生ニテ主任其他ノ要位ヲ占ムアルモノ多ク職工ハ約三千五百人(五年七月現在)ニシテ警備司令部步兵一大隊アリ警備ニ任セアリ 職工モ比較的好遇セラレアルヲ以テ近時罷業ノ聲ヲ聞カス 作業狀態モ眞面目ニ從事シアルカ知シ	本廠ハ破廠(天砲製造工場)機器廠(機軸工場)砲彈廠(砲彈信管工場)機軸工場(機軸工場)四工場ニ別テシテ令廠ハ機軸工場(又砲彈小銃機関銃彈工場)火藥廠、鑄鋼廠アリ 尚炸藥及裝藥工場本廠ト相離シ黃浦江岸ニアリ 砲彈廠ハ規模可ナリ大ニシテ機軸工場ニ追撃砲ヲ製造シ得ヘリト謂フ 彈丸全部鑄鉄製ニテ探出鋼彈ニシテ彈体ノ機軸作業モ頗ル粗雑ナリ電氣熔接機ニヨリ追撃砲彈彈尾ヲ熔接ス 槍廠ハ最モ内容充實シ七九口徑米國式(フロニング)機関銃ヲ製造スル設備ヲ有ス工場ハ階建ニシテ廣クモ機軸工場ニ別テシテ 火砲製造設備ハ最初單位製造(構)機軸工場ニシテ食料ナルモ山砲ヲ製造シテハ砲架ニシテ旧時造レルニ四種加農アリ現時ハ專ラ火砲修理ヲナセルモノ知シ 実包工場、填裝藥彈機ハ七九口徑分間製造実包約五十發ノ速度ヲ有スルカ知シ 火藥廠ハ專ラ無煙藥ヲ製造スルモ設備旧式ナリ 動力ハ目下全部電力ヲ用ヒ外部ヨリ配給ヲ受ケアルモノ、如ク機軸ハ獨ルルモノ米佛等混合シテ一般ニ旧式モノ多シ毒瓦斯製造ハ行スト謂ヘリ	小銃 製造可能ニシテ漢陽ニ製造ス 重機関銃 米國(アイン)七九口径水冷式月製約六、七 山砲 從來製造セル現時ハ野砲(三八式)六五口径三式野砲、追撃砲三八式十五榴等、修理ヲナセルモノ知シ 追撃砲 口径八二粒肉厚約一三粒機軸ナリ砲身長約一六粒砲尾翼翼式ナリ現時製造シアラス 小銃機関銃実包 日製約廿萬發(十三時間作業)七九口径五種ヲ製造ス 火砲用藥莖 地金ヨリ完成迄 七五粒野山砲彈 日製最大作業者發 追撃砲彈 日製約二〇〇〇發 無煙藥 日製約九〇磅 野山砲小銃 奉欽用裝藥 (雷汞、茶褐藥等)製法作ス 毒瓦斯研究施設シアラス、今廠ニ小ナル化學試驗所アリ 本工廠ハ外國租界外ニ在リ外國關係ナキヲ以テ戰時利用差支ナレ 職工ハ上海土着ノモノ多シ 中央軍砲兵隊戰事ノ際ニ主トシテ直接照準ヨリ三乃至五千五百リ射撃シテアリ、射撃指揮士カラハ勿論ナルモ砲彈裝藥等ノ製造上精度不十分ナルモノ因ナルヘリ
漢陽兵工廠	本廠漢陽 分廠 黑山分廠	本廠及黑山分廠ヨリ資本千五百萬元南京軍政府兵工廠直轄ニシテ廠長及副廠長、下技術委員、金總務處、圖案室、工務處、工務處ハ主要製造各廠ヲ有ス重要職員ハ逸留學生出身多ク職工約三千六百名ニシテ職工大部ハ三年以上在職シ廣東人大半ヲ占ム外國ノ勢力ノ關係ナシ職工大部ハ槍廠砲廠彈廠ナリ約一千名宛ナリ(昭和六年一月)經費ハ毎月約四十萬元ヲ要シ毎年經費不足ニ現在約三百萬元ノ積アリト謂フ 本工廠ハ旧式ニシテ中共共產黨時代ニ破壊セラレタル修理工場ナリ	製造作業設備ハ工務處ニアリ機軸廠、木工工程所製槍廠(小銃機関銃)槍子廠(彈藥)砲廠(火砲砲彈)電機廠、煉鉄廠アリ分廠ニハ製約廠アリ機軸類ハ日等ノモノ多ク旧式ナルカ知シ原料ハ大部外部ヨリ供給ヲ受ケ鋼材ハ主トシテ英國ヨリ時ニハ獨白國產モノヲ使用シ鋼材ハ日本ヨリ亜鉛ハ湖南ヨリ補給スト謂フ 槍廠及砲廠ニ技師トシテ個人各一名アルカ知シ	槍廠(日製造力) 赤兵銃 三九粒 騎銃 六一一〇 拳銃 四〇 機関銃 二 砲廠(日製造力) 山砲 四門 砲臺司令部備有散彈砲 追撃砲 一 (野砲ナラン) 小銃彈 五〇〇〇發 奉欽彈 一〇〇〇發 機関銃彈 五〇〇〇 砲彈 一〇〇〇 追撃砲彈 三〇〇〇 民國九年未だニ次知リ製造セルモノ知シ 赤兵銃(三九五)騎銃(八六六)拳銃(七〇七) 機関銃(四三九)砲(一九)追撃砲(三三三) 小銃彈(三三三)奉欽彈(五二四)機関銃彈(三三三)砲彈(二二四) 追撃砲彈(六六九)三榴彈(九九九五) 將來各機軸機軸試驗室等、新設シ製作力増進ヲ圖リ、四拾五口径七九口径、三三口径機関銃、四拾五口径、三三口径、三三口径機軸、毒瓦斯研究施設シテ決定ナリト謂フ

# 分割撮影ターゲット

分割した部分の撮影順序	
分割撮影した理由	A 3版以上のため
文書等名	支那兵器製造所一覧表 (其三)
上記のとおり分割撮影したことを証明する。	

支那兵器製造所一覽表

(其三)

(技師本調査班)

名稱	位置	經營	主要設備	製造能力
平津修械分廠	河北省大沽 (白河タロ) 大沽造船所内	本廠ハ光緒二十年頃船舶修理ヲ目的トシ設立セラレタルモ其後内部ニ陸軍用兵器製造ヲ行ヒ漸次之ヲ擴張セリ奉天軍ノ北支ニ占據セル際ハ其勢力下ニアリシカ民國十七年以後山西軍ノ手ニ歸シ山西軍撤退後東北軍ノ手ニ歸シ造船機関修復旧擴張ニ着手セントスル模様ナリ 資本金銀三百萬元ト称スルモ明カニ職工數ハ九百五十名内外ナリシモ其後増加シ四百名ニ達セルモ訓練工約四十名ナルカ知シ 張慶長大沽造船所擴張充實ヲ計リ十月百現銀千萬元大沽ニ送付シ切テ準備アリテ外國製カカナシ	造船所ハ砲槍廠鑄造工場鍛冶場木工輪機廠及船渠六部ニ分シ砲槍廠造船兵器製造ニ從事ス 山西軍撤退後陸軍用兵器製造ハ太原兵工廠ニ運搬セラレ使用ニ堪ヘサル旋盤二十台アリ 東北軍接收後閉鎖セルモ造船所ハ開設シアリ 東北軍兵工廠ヲ失ヒタル今日必ス再開スルナランカ 原料材料ハ在津外國商人及支那商ヨリ購入ス	造兵(從來製造セシモノ) 迫撃砲彈・痛砲・大刀・軍艦・軍用汽艇ノ修理・自動短銃(ベルグマン式) 造船(大沽造船所) 汽船汽開・各種機械汽船ノ修理
平津修械廠 (旧直隸兵工廠)	天津河北 大経路	光緒二十年北洋鎮守使局トシ設立シテ西本軍工廠ヨリ德州兵工廠機関搬入シ一部ヲ兵工廠トシ爾後奉天山西軍撤退ト共ニ機械類ヲ持テ去ラシ奉天軍用ニシテ兵工廠トシテ計畫セリト謂フ 民國十九年九月東北边防軍ニ屬ス職工數ハ九百五十名内外ナリシモ山西軍撤退時約二十五名外ニ山西軍若テアリシト謂フ外國關係ナシ	造撃廠ハ依然天津造船廠トシテ存存シ其一部ヲ兵工廠トセルモノニシテ主要機械ヲ屬ス持テ去ラシテ大ナル設備ナシ 材料ハ太原兵工廠及市内金物店ヨリ購入スト謂フ	製造品目 銃劍、製造及各種兵器ノ修理 作業カハ山西軍使用當時 一日小銃修理 銃
平津修械廠津廠	天津河北 鉄道外	民國十九年九月東北边防軍ニ屬セラレ山西軍當時ハ職工三五名アリシト謂フ 奉天軍ニ於テ再度兵工廠トナス計畫アリト謂フ	山西軍撤退ニ伴ヒ主要機械ヲ山西ニ搬出シクリト謂フ 山西軍當時ハ原料材料ハ外部ヨリ購入セリ	製造品目 山西軍當時ハ小銃及火薬ヲ製造セリト謂フ 作業カ 山西軍當時ハ小銃修理一四挺内外 火薬ハ不明ナリ
濟南兵工廠 (新城兵工廠)	山東省 濟南市 郊外東北 方新城	陳調元時代ニ相當ノ作業カヲ有セシモノ山西軍機械類ヲ持テ去リ後中央軍政部直轄トシテ四散セル職工ヲ募集シ作業ノ一部ヲ開始セリト謂フ 盛時職工數二千五百人アリト謂フ不明ナリ	槍彈廠 炸彈廠 機卷廠 製藥廠、四廠アリ 職工ハ工場機械一部破壊セラレ又山西軍撤退際機械一部ヲ運搬セシカ知シ	製造品目 小銃彈日製六〇〇〇発(昭三二。調) (露國式七九。九五機) 飛行機用爆彈、手榴彈
西安兵工廠 (旧鞏縣兵工廠)	鞏縣			小銃日製五。挺(昭三二。調)
德州兵工廠	山東 德州	開鎖中		
廣東兵工廠				小銃 月製六〇。(昭四一。調ニヨル) 重機関銃 銃彈藥 ク六七〇〇〇。

